

浄土真宗における中陰法要の意義——中有思想と儀礼的展開を通して——

榎 屋 達 也

本論文の目的

浄土教において中有（中陰）は認められるべき思想なのであるか。浄土真宗の基本的な立場から言えば、現生において信心を獲得したその時に往生が決定し、臨終と同時に浄土に往生して悟りを開くとされるため、そこに中陰という期間はなく、本来は追善供養も必要とされない。したがって中陰法要は、報恩（仏恩報謝）としての営み、仏縁を結ぶものとして位置付けられる。

以上の論は、念仏者はすでに阿弥陀仏による摂取不捨の救済に預かっているから、死者に対する追善は必要ないという考えに立ったものである。また、追善としての中陰法要を否定し、あくまで報恩として位置付けることは、真宗独自の理解であると言えるが、その思想的な起源や根拠が明示されていないことは問題である。

本論文の目的は、浄土教において中有思想をどのように位置付けるべきかを、中有思想の起源とその儀礼的展開を考察した上で、最終的には、真宗において中陰法要を報恩として位置付ける説（本論

文では「中陰報恩説」と呼称する）の思想的背景を明らかにすることである。

本論の概要

第一章では、インドにおける中有思想の起源を説一切有部の諸論書に求めながら、中有概念の成立に関する有力な二説（伴戸昇空氏の「中般涅槃」起源説、池田練太郎氏の「輪廻思想」起源説）を検討し、さらに中有思想の起源に関する新たな可能性として、原始仏教における「命根」、「健達縛」、「識」といった概念を取り上げ、中有概念の成立過程について考察した。その結果、原始仏教においてこれらの概念は、次生へと生存を相続させるものとして注目されたが、そのいずれもが単独では輪廻の主体となるには不十分であり、その不足する部分を補完するものとして、有部初期の論書成立時に見られた「中有」と結び付き、「五蘊を具えた存在」としての中有概念が成立したことを指摘した。

第二章では、中国における中有思想の受容と展開について、六朝

時代に輪廻の主体をめぐって起こった神滅不滅論争や、鳩摩羅什によって翻訳された『成実論』の説示を窺い、中有思想が中国在來の儒教や道教の思想と結び付き成立した「追善供養」については『灌頂經』等の中国撰述經典を中心に考察し、さらに『大乘義章』等の中国諸師の著述によって、その受容態度について検討した。その結果、『成実論』成立以後の中国仏教界における主流は「無中陰」という見解であったが、時代が下るにつれて中有を認め、かつ追善供養を勧める經典が成立し、浄土信仰においても積極的に受容する態度が見られることを指摘した。

第三章では、日本における中有思想の受容と展開について、仏教傳來より平安中期に至るまでの仏教受容の動向について概観し、特に貴族階級の一部を中心に受容されてきた当時の仏教が、一般民衆においても広く浸透していった平安時代において、最も大きな影響を与えた源信の思想と、その後の法然がどのような立場を示しているのかについて考察した。その結果、臨終の行儀を重視し、臨終正念による來迎を志向した源信の立場に対して、法然は追善として中陰仏事を勤修しているものの、その行は専ら念仏一行に限定し、あくまで形式化された臨終行儀には固執しないという立場であり、臨終來迎において初めて往生決定を語るのではなく、平生の念仏による護念を説く平生重視の立場であったことを指摘した。

第四章では、臨終來迎による正念を説き、平生の念仏を重視した法然の立場を受けて、さらにそれを展開させた親鸞の基本的な立場

について考察し、覚如・存覚・蓮如といった真宗歴代、さらに江戸宗学における理解について検討した。その結果、親鸞が中陰や追善に言及する史料は見出されないが、往生即成仏・現生正定聚・平生來迎といった親鸞の思想的立場から考えても、中陰や追善という考え方は認められず、歴代も基本的にはその立場を継承している。しかし江戸時代に入ると、月筌や性均によって「他力の追善」という論理が新たに構築され、積極的に追善を認める風潮が芽生えていくが、その思想的背景に両者の師である知空の教学が想定され、特に「三業帰命」の風潮が「中陰報恩説」の成立に関わる重要な要因であったことを指摘した。

結論

真宗において「回向」とは、如來の他力回向に外ならず、衆生の回向を認める余地は一切なかった。しかし、現実問題として勤行の終わりに「回向文」を唱え、また一般的には追善として理解されてきた中陰の法要を勤めている以上、その矛盾を会通しなければならぬ歴史的必然性があった。このような状況下において主張されたのが、月筌や性均による「他力の追善」という論理であった。

真宗では追善を否定した『歎異抄』第五条の立場を受けて、歴代も「報恩」あるいは「獲信の縁」として中陰を位置付け、現在では「中陰報恩説」が定説となっている。本論で取り上げた「他力の追善」という理解は、まさに「中陰報恩説」が定着していく過程にお

いて主張されたものである。したがって、「他力の追善」という理解は「中陰報恩説」が確立し、次第に定着していった背景の一つとして考えることができる。

また、性均が『追薦要訣』の跋文で、亡父の十三回忌を勤める際に追善の法を求めた結果として他力の法に出遇ったことを述べ、さらに序文には、門信徒からの追善の求めに対する僧侶の心構えを示すために本書を撰述したと窺える点は注目すべきである。つまり性均が、門信徒からの追善の依頼と、真宗教義との矛盾という葛藤の中で、亡父の回忌法要を契機として導き出した「他力の追善」という論理は、まさに現場の僧侶として門信徒の要望に応えるためのものであったのである。